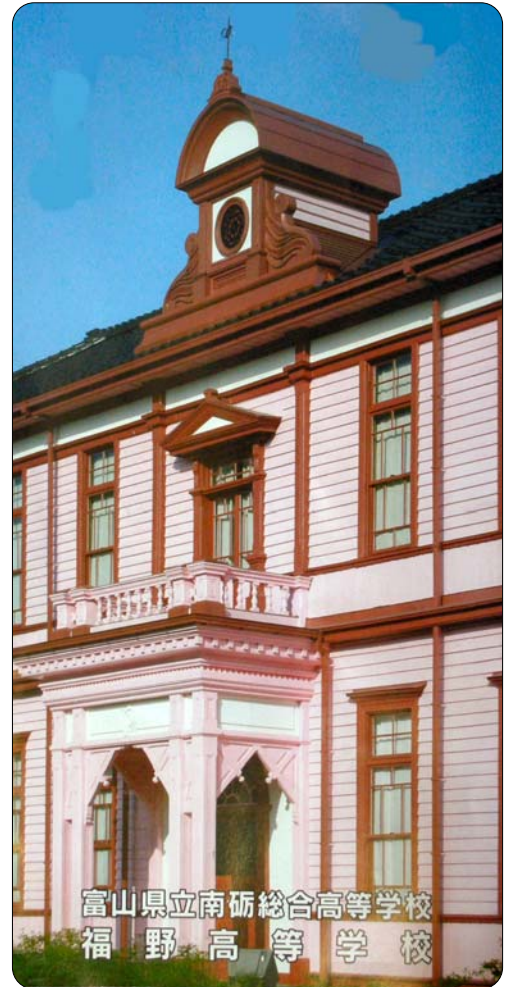




旧富山県立農学校本館

現在の高等学校で国重文指定の校舎を持つ学校は5校あります。それらは、本校と前号で取り上げた本県の太田第一高等学校の旧講堂のほか、福島県立安積高等学校、富山県立南砺総合高等学校福野高等学校、岡山県立津山高等学校の旧本館です。いずれも、水海道一高の同窓生や地域の人々が、外観を旧水海道中学校の講堂に模して建設されたセミナーハウスに感謝し愛着と誇りを持っているように、それぞれにおいて創立期以来の学び舎に限りない愛着を持ち、保存に尽力し現在に至っています。今回は富山県の福野高校「巖浄閣」を紹介しましょう。



富山県立南砺総合高等学校  
福野高等学校

巖浄閣玄関屋上のゲートル（屋根飾り）

## 旧富山県立農学校本館「巖浄閣」 明治の宮大工が設計・施工した洋風建築

南砺総合高校は、平成17年4月、南砺市（砺波平野に位置）にある富山県立高校4校が連携して発足した。その中の1校、福野高校に、平成9年5月、国から指定された重要文化財、旧富山県立農学校本館「巖浄閣」がある。

富山県立農学校は、明治34年10月母体である富山県簡易農学校（明治27年創立）を改称・創立された。簡易農学校は、天保9（1838）年砺波郡の素封家、島家に生を受けた巖氏の献身的活動を基に誕生した。氏は砺波地方の産業育成には、人材養成機関としての農学校設立が緊要であるとして、早くから県当局や地方有力者に熱心に説き続けた。

しかし病魔におかされ再起不能を知り、農学校を建設して欲しいと遺言し、資産の大部分を県令に遺贈、明治12年、42歳の若さで亡くなった。氏の遺志は地方有志に受け継がれ、その熱心な運動によって、15年後に結実した。富山県立農学校とはなったものの、廃校となっていた小学校の教場を利用するなど校舎には不自由していた。

明治36年4月、高燥・眺望に恵まれた新天地に、和洋折衷木造二階建ての本館と左右両翼に平屋建の教室棟から成る新校舎が竣工し、移転することができた。

新校舎を設計し施工したのは、地元の大工藤井助之丞氏である。当時の日本における民間の建築技術の水準の高さがいかなるものか推測できると思う。この本館こそが、巖浄閣と名付けられる学び舎である。

昭和43年新校舎建築のため、二階建て本館部分を現在地に修復・移築した。それを機に同本館を島巖氏に感謝し、氏の先見と遺徳を讃え「巖浄閣」と命名された。

## 建物の様式

本校旧本館はゴシック様式であるが、この建物はコロニアル様式である。木造下見板張りペンキ塗り、上げ下げ窓の西洋建築のデザインを基本とし、玄関ポーチ部分は建物から突出している。その上方はベランダとなっていて、二階の壁面はまっすぐに通っている。ポーチ上の窓だけがギリシア風の飾り窓になっている。その上方の二階屋根に特徴のあるゲートル（飾り屋根）がのっている。玄関の開き扉の上は半円形の欄間となっている。

縦長な上げ下げ窓や外壁の下見板張り、復元された正門の門柱など、わが旧土浦中学校に共通する部分が少ない。

## 保存と活用

平成9年、国から重要文化財に指定され、平成14年に保存修理が始まり、17年8月に完工し、正門も復元され、建築当時の姿を現した。

移築後、「島巖記念室」ほか展示室などを設け、生徒の利用にも供していたが、現在では「富山県立美術館移動美術展」、「特別企画展」、「コンサート会場」など、外部に向けても多様に活用されている。その活用には「保存活用委員会」が当たっているが、地域は勿論県レベルでの保存と活用がなされ、文化活動上、重要な拠点の役割を担うに至っている。

## 《宝の持ち腐れ》にしないために

全国には、文化財の指定こそ受けていないが草創期の校舎を有する高校は数多くある。移築改装して記念館・資料館・現役教場として保存・活用している例が多い。

重文指定の校舎では、通年一般に公開されている前述の「巖浄閣」や郡山市の郷土博物館として開館している安積高校旧本館は、既に大がかりな解体修復を済ませ、文化財としての在るべき姿を確立しているといえよう。

本校旧本館は、限定的な公開に止まり、活用面でもまだまだの感があり、建物の保存・活用になお一層の創意工夫が必要である。

旧土浦中学校本館は、他の重文校舎と比べても決して見劣りするものではない。掛け値なしに第一級の文化財校舎である。しかし、専門家の調査で、眼に見えない建物内部にかなりの老朽化が確認されている。このままの状態が続けば近い将来、間違いなく朽ち果ててしまう。何としても全面的な解体復元修理による保存こそ緊急の課題である。その実現には、同窓生、地域の人々や県や国の理解と支援が必要である。